

Xué ér bù sī zé wǎng  
学而不思则罔。まな おも すなわ くら いせい  
学びて思わざれば則ち罔し。〈為政第二〉

桜美林大学名誉教授 / 孔子学院講師 植田渥雄



孔子は、何をさておいても「学ぶ」ことを重んじる人でした。『論語』には次のような言葉もあります。「吾かつて終日食わず、終夜寝ず、以て思う。益なし、学ぶに如かざるなり」(衛霊公第十五)。自分がかつて寝食を忘れて日夜一人で考えぬいたことがあるが、何の役にも立たなかった。やっぱり先人から学ぶに越したことはない、という意味です。

この場合の学とは人から教わったことをそっくりそのまま真似るということでしたね。人から学ぶことこそがあらゆる知識と文化の基礎になると孔子は考えていたわけですが、かといって人真似をすればそれで事足りるというわけではありません。

そこで出てきたのが表題の「学而不思则罔」(学びて思わざれば則ち罔し)です。ここで言う思とは「自分の頭で考える」ということです。罔は網と同義で、頭に網がかかったようで目の前が暗いということ。つまり、人真似ばかりで、自分の頭で考えることをしなければ何事も正しく見極めることができないということです。

ところで、思について孔子は九思 Jiǔ sī という言葉を使っています。思は九つの種類に分けられるということです。その中から二三拾い挙げると、「視思明, 听思聰 Shì sī míng, tīng sī cōng」(視るには明を思い、聴くには聡を思う)(季氏第十六)というのがあります。

これは見聞きしたことを的確に把握しよう

と思う、ということです。単に視聴覚が優れているという意味ではありません。物事の本質を見極めるよう心掛けるという意味が加わっています。現在一般に使われている「聡明」という言葉はここからきています。「聡明」とは言うまでもなく「知性の働き」を表わしています。

このほか、「疑思问 Yí sī wèn」(疑いには問を思う)というのもあります。疑いがあれば問いたすことを思う、という意味です。これも今日使われている「疑問」のもとになる言葉ですが、現在とはやや異なり、疑いを「問いたす」、疑問を「究明する」というのが本来の意味でした。これも知性の働きを表わす言葉で、現代の「科学する心」に一脈通ずるものがあります。

さて、話をもとに戻しましょう。この表題の後には、「思而不学则殆 Sī ér bù xué zé dài」(思うて学ばざれば則ち殆し)という言葉が続きます。自分の頭で考えることも大事だが、だからといって先人の知恵から学ぶことをおろそかにすると、危ない。これは現代人に対する警告の言葉と受け取ることもできます。

孔子は物事を「正」と「反」の両面から考える人、つまりパラレル(対比的)な思考の持ち主でした。この対照的な二つの文句に、その特徴が端的に表れています。これこそが孔子の真骨頂と言ってよいでしょう。

(わりりい「中国語で読む漢詩の会・講師)